

オーストリアで自分をみつめる

はじめに

私は大学で美学・美術史を学んでおり、国民と芸術・文化の関係性や文化政策に強い関心を抱いている。そのため、芸術の国ともいえるオーストリアを実際に訪れ、人々と芸術や文化のつながりをこの目で確かめたい一心で、本事業への参加を決心した。

派遣を終えた今振り返ってみると、芸術にとどまらない予想をはるかに超えた様々な経験、学びがあった。以下、「いかに自分の時間を使うか」「ボランティア活動」「意思表示の重要性」の三つを中心に述べていくこととする。

いかに自分の時間を使うか ～ホームステイを経験して～

私は、ウィーンとリンツの中間にある小さな町、アムシュテッテンにホームステイした。ホストファミリーは、医者であるお母様、先生であるお父様、私と同世代の女性という構成であった。一般に、日本であれば、医者と先生は非常に忙しく平日は夜遅くまで働き、休日也十分に休めないだろう。しかしながら、私のホストファミリーは、平日は18時頃には帰宅し休日は仕事をせずに、ガーデニングや読書などの趣味を楽しんでいた。ヨーロッパはワークライフバランスを重視していると以前から知っていたが、体現している家庭に実際に滞在してみると日本との大きな違いに改めて驚いた。

ホストファミリーに日本の労働時間がいかに長いか、休日にも働く人がいかに多いかを説明すると驚いた様子で「なんて大変なんだ」とおっしゃっていた。社会人だけでなく学生も日本に比べ、早い時間帯に帰宅し、十分な睡眠時間を確保できているという。

また、ホストファミリーはゆったりとした音楽を流しキャンドルの光の中、1時間半以上の時間をかけて昼食や夕食をとっていた。特別豪華な食事ではないのだが、じっくりと味わうことができ食事するたびに非常に心が満たされた。

日本にしか住んだことがない私は、平日も休日も朝から晩まで勉強する受験生期間を経て、次第に勉強以外

のことは行うことに罪悪感を覚えるようになっていた。そして、常に何かやるべきことに追われ、食事もなるべく早く済ませ、非効率的なものはなるべく排除しようとしていた。大学入学後もその感覚や習慣は抜け切れなかった。

しかしながら、ホームステイを通じて、勉強や仕事が人生のすべてではなく、自分がやりたいこと、好きなことを行うことは勉強や仕事と同じくらい人生を送る上で重要なことではないかと思えるようになった。

また街ゆく人を見ても、公園で散歩をしたり、カフェでゆったりと過ごしたりしている人が多かった。

多くの人が心にゆとりを大切にしながら人生を楽しんでいるのだと感じた。日本ではこのように感じたことはなかった。

もちろん、真面目に粘り強く勉強したり働いたりできることは素晴らしいと思う。しかし、オーストリアで人々の暮らしぶりをこの目で確かめ、時間の使い方や日々の過ごし方は国によってここまで異なるのだと驚くとともに、果たして現代の日本人は幸せだろうか、という疑問を抱かざるをえなかった。



ホストファミリーとの団らん

ボランティア活動 ～オーストリア赤十字社を訪問して～

オーストリアでは、特定の年齢や地域等問わず、非常に多くの人々が、楽しみながらごく自然にボランティア

活動を行っていた姿が印象的だった。

オーストリア赤十字社の救助犬部隊を訪問したが、活動を行っている人の多くは、ボランティアだという。つまり、自分の本来の仕事が終わった後、救助犬部隊で活動するのである。実際の活動風景を拝見したが、ボランティアとは思えないほど本格的であった。例えば、地震によりがれきに埋もれた人を発見することを想定した訓練では、コンクリートのがれきの山に赤十字社の方が実際に潜り、救助犬が助けるまで待ち続けていた。がれきの山は大規模であり、救助犬が見つけられない場合、長時間待つこともあるそうだ。高温になる夏は熱中症等に気を付けなければならず安全とは言い難い。しかしながら、赤十字社の方々是非常に楽しんで活動をやっておられた。それと同時に、災害時や緊急時に人命を救うという使命のもと、救助犬とともに日々トレーニングを積んでいることに誇りを持っているようだった。赤十字社とは別に本業があることを忘れさせるほどアクティブに、そして真剣に取り組んでおられ感銘を受けた。

また赤十字社の方々だけでなく、ホームステイ先の私と同世代の女性も移民にドイツ語を教えるボラティアをしていたりするなど、非常に多くの人々が何かしらのボランティア活動を行い、社会貢献していた。

日本はボランティア活動を行う人はあまり多いとは言えないし、行く人=偉い、真面目だというイメージがあると思う。私も実際、大学でボランティア活動を行っているが、日本では「ボランティアしていてすごいね、偉いね」と言われることがよくある。もちろんそのように言われると嬉しいが、日本ではボランティア活動がまだ特別なことだと考えられている裏返しなのではないだろうか。

日本に比べ、オーストリアではボランティア活動がはるかに定着しているのは、心のゆとりがあるからではないかと私は考えるようになった。ボランティアは、他人



オーストリア赤十字社 救助犬部隊を訪問する

や社会のために無償で自分の時間や労力を費やす必要がある。やはり、自分以外の人や物事を考えるということは、心にゆとりがあってこそできるものだろう。そして、この心のゆとりは前ページで述べたように、勉強や仕事だけでなく、自分の趣味ややりたいことを大切にする生活から生まれるものであると思う。

意思表示の重要性

～小学校訪問等を通して～

私は、本事業を通して忘れかけていた意思表示や自分の思いを伝える重要性や喜びを再確認できた。

最も印象的だったのは、オーストリアの小学校を訪問した際に、先生が「生徒にはNOと言えるように教えています」と言われたことだ。例えば、給食が食べきれないほどの量であったり、苦手な食材があったりすれば、残したり初めから少なくしたりできるそうだ。先生は、日頃からNOと言うことに抵抗を感じていると、本当にNOと言わなければならないとき（痴漢やいじめなど）に言えないとおっしゃっていた。

日本の学校では、多くの場合アレルギーを除き、みんな同じメニューをほぼ同量食べなければならない。そのため時間内に食べきれずに、一人昼休みも食べたり、泣きながら食べたりする生徒もいるという。

小・中学生のころは、そのような状況を特におかしいとは思わなかった。しかし、オーストリアの小学校を訪れ、日本のやり方に疑問を覚えるようになった。もちろん、各国にあったやり方や考え方はあるだろうが、自国では当たり前だと思っていたことが、国が変わればそうではないということを身をもって感じた。

他にも、本事業では日本青年の代表という立場であったため、様々な場面で「日本は怎なの？日本の青年は怎考えるの？」と聞かれた。はじめのころは、日本全体の一般的な考えを言わなければならないと気負っていた部分があり、言葉に詰まることも多々あった。しかし、途中で「日本全体のことを知らなくても、『私の場合は…』と前置きした上で、自分の考えを話したほうが聞き手も嬉しいのではないか」と考えるようになり、積極的に述べられるようになった。

また、本プログラムの最初のころ、私たちオーストリア派遣団はハイキングや施設訪問をした際、各々非常に楽しんでいただけたのだが、それをオーストリア人のガイドやコーディネーターの方に言葉として伝えておらず、彼らが「日本青年は楽しめたのだろうか」と心配して副団長に尋ねるということが何度かあった。徐々に、派遣団の中でも「伝えたいことがあったら些細なことで

も言葉にしよう」という雰囲気が出てきた。質問をするだけでなく、感想を伝えることで案内してくれた人を安心させることができるし、尊敬の念を表す一つの方法なのではないかと気づかされた。

私は、幼いころは自分の考えや想いを皆に伝えることが好きで実際に行っていた。しかし、成長するにつれ、「人と違うことをしたり目立ったりしたら、出る杭は打たれる」と気付きはじめ、徐々に息苦しさを感じるようになっていった。そして、何かをした際に感じる力も弱くなり自分の考えすら持たないこともあった。だが、上記のようにオーストリアでは久々に自分の考えを伝える、伝えなければならない状況になり、伝える楽しさを再確認した。



小学校訪問にて

これからの私 ～前進し続けるために～

私は、「見て聞いて、伝えて、学び、成長し続ける」姿勢を忘れずに今後の生活を送りたい。今回の事業で成長できたのは全て、多様な人々との交流によるものである。外部と接触することで、ときに摩擦が起きたり多大なエネルギーを必要としたりすることもある。しかし、自分が行動しなければ何も生まれない。ここでの学びをばねに、自分がやりたいことにさらに挑戦していきたい。

さいごに

冒頭で述べたように、本事業への参加動機は当初、オーストリアの文化政策や芸術・文化と人々の関係性を学ぶことであった。振り返ってみると、それらに留まらない様々なことを学び、得ることができた。

自分を180度変えるような出来事が起こったわけではない。しかし、上記のように今まで自分が置かれていた

環境や考え方が絶対的でないことを気づかされ、自分の日頃の意識や行動を変えるきっかけを確実に得ることができた。何よりも、企業や施設を訪問し知識を得るだけでなく、それを自分の頭で整理し消化することで、自分の内面をみつめ成長につなげられたことに自分自身、非常に驚いている。

確かに、本事業に参加するかどうか迷うこともあるだろうし、少くない時間とお金をかけて何のために参加するのかと思う人もいるだろう。ただ、私は何を得られるのか分からないからこそ、挑戦し参加する意義があるのではないと思う。

最後に、一生に二度と経験できないような素晴らしい事業を作り上げてくださったすべての方々に心からの感謝を申し上げたい。

AS ONE ～相互理解の大切さ～

はじめに

応募当初、私は内閣府青年国際交流事業に三つの魅力を感じた。一つ目は、個人では訪問できないような派遣国機関へ表敬訪問できること。二つ目は、派遣国での視察・訪問のみならず、ディスカッション・ホームステイ等で現地の方々とコミュニケーションを取る時間がたくさん用意されていること。三つ目は、日本青年代表として派遣国に派遣されることである。これらの経験はなかなかできない体験であり、その立場を認識し、責任を持って行動することはとても貴重な経験であると思い応募することを決断した。

報告書を作成している現在、本事業で体験・経験したことを振り返っている。派遣国であるオーストリアで過ごした日々は、応募当初私が本事業の魅力に感じていた上記三点を日々体験・経験することができた中身の濃い事業であった。

本報告書では、主に下記の三点について説明する。一つ目は、本事業で特に印象に残った具体的な体験。二つ目は、本事業やプログラムを通して何を学び、どのような成果を修めたのか。三つ目は、今後、その成果を事後活動や青少年活動にどのようにいかしていくかの三点についてである。

1-1.日本人社員の方々とのディスカッション

私が特に印象に残っている体験が二つある。

一つ目は、Primetals Linzというグローバルに事業を展開する製鉄機械企業を訪問したことである。当該企業は親会社の一つに日本の三菱重工業を持つことから、多くの日本人社員が従事するグローバル企業である。現在、私は大学三年という時期から、卒業後の進路について考えている。今後、自分がどのような道に進みたいのかプランは明確ではないが、海外で働きたいという気持ちを持っている。そうした状況の中で、Primetals Linzのようなグローバル企業で働く日本人社員の方々とディスカッションや懇談ができたことは、今後の自分の進路を考える上でとても参考になった。海外で

生活する事、海外で働く事、日本で働くことと海外で働く事の違い等、気になった事を沢山質問することができた。日本人社員の方々との意見交換を通して、自分の知らなかった海外で働くこととはどういうことかについて知ることができた。例えば、海外で働く方法としてPrimetals Linzのように日系の親会社を持っている企業の場合、親会社から出向という形で働く方法があれば、親会社から自分の籍を転籍して働く方法もある事等、海外で働く方法についての新たな発見が得られた。

また当該企業への訪問で、当該企業のスローガンでもある‘AS ONE’という言葉も印象的であった。「完全に互いの文化を理解することは難しいが、片方の文化を押し付けず互いを理解し合っていくことが大切」というスローガンの意味を聞いた時、グローバルに働く上で大切な考え方であると同時に、グローバル化が更に進むこれからの社会で生活していく上でもとても大切な考え方であると感じた。



Primetals Linz の社員の方々との集合写真

1-2.ホームステイ

私が特に印象に残った体験の二つ目は、ホームステイである。ホームステイはその国の生活や文化を知ることができる良い場であると思う。実際にホームステイを通して、派遣国であるオーストリアの生活や文化を垣間見ることができた。例えば、家庭料理、余暇の過ごし方等である。ホテル・レストランでは食べることでできなかった料理を知ることができ、余暇の過ごし方についても家族と過ごす時間が

日本と比較してとても長く家族を大切にしていることを感じる事ができた。二泊三日と限られた時間ではあったが、ホストファミリーに恵まれとても充実した日々を送ることができた。



ホームステイ先の食卓での集合写真

2-1.派遣団からの学び

本事業を通して得ることができた学びについて二つの観点から説明する。

一つ目は、派遣団からの学びである。団長・副団長・派遣団員それぞれが、これまでのバックグラウンド、この事業に参加した理由・目的も異なっていた。派遣前にこれまでの互いについての話やオーストリアについてのイメージ等を共有できたことで、派遣先であるオーストリアでは様々な視点から物事を見ることができた。例えば、私個人は音楽や建築に対する興味・関心があまりなかった。しかし、派遣団員に音楽の先生・大学で建築を専攻している人がいたことで派遣先であるオーストリアの音楽・建築について事前に学ぶことができ、派遣先では現地コーディネーターの方の音楽・建築への説明をスムーズに理解することができた。また団長・副団長とも沢山意見交換をさせて頂いた。団長からは、本事業での経験をどのように就職活動でいかして行くかについてアドバイスを頂いた。普段社会人の方々とこれ程長く一緒に過ごす機会や、意見交換をする機会はなかったため、とても貴重な時間であり多くの学びを得ることができた。副団長からは、オーストリアで日本文化紹介が上手くいかなかった時、どの部分を改善すれば次回上手くできるかのアドバイスを頂いた。その結果、二回目の日本文化紹介では、改善点をいかにすることができ前回より上手く伝えることができた。

以上のように本事業を通して、派遣団から多くのこと

を学ばせて頂くことができた。

2-2.派遣国での学び

二つ目は、派遣国での学びである。派遣国では沢山のことを学ぶことができたが、その中でも特に「心のゆとり」の大切さを学んだ。派遣国での滞在中、現地の人の人との接し方や働き方にとっても感心した。なぜ自分がこのことに感心したのか考えてみた時、出てきた答えが「心のゆとり」であった。心のゆとりが大切なことは当たり前のことかもしれないが、普段の生活の中で大切であるのに忘れてしまっていることのようにも感じた。自分がイライラした時のことを思い出してみると、やはり心にゆとりがない時であった。心のゆとりがあることで人に優しく接することができ、仕事もいきいきとできることを再認識することができた。現地ではそのことに気付いてから、少しの心のゆとりを持ちながら活動することができた。日本に帰国してからこの報告書を作成するまで、また心のゆとりを忘れてしまっていた。少しでも自分が感心したオーストリアの人々に近づけるよう、改めて普段の生活の中に少しの心のゆとりを持って過ごすことを意識しようと思う。



オーストリア派遣団とオーストリア青年との集合写真

3.今後、この経験をどのようにいかすか

私は本事業を通して得たことを、大学で共有しようと考えている。具体的には、私が所属する大学には授業外でのボランティア活動等、様々な活動に取り組んでいる学生が他学生に自分が経験した事を発表する「場」である「ボラカフェ」という企画がある。この企画を活用し、他学生に自分が本事業を通して経験したことを伝えようと思う。共有することで本事業を他学生に紹介することができ、また自分自身も自己の体験の言語化を

行えるので相互に有益あると考える。また、2019年が日本・オーストリア友好150周年の記念の年でもあるので、本事業紹介のみならず自分が本事業を通して感じたオーストリアの魅力も一緒に発信して行こうと思う。

最後に本事業に携わって下さった関係者の方々、貴重な経験を本当にありがとうございました。そして多くの学びをくれた派遣団のメンバーにも感謝している。今後、本事業を通して得ることのできた体験・経験そして学びをしっかりと社会に還元できるよう、邁進して行きたい。